

《 愛 知 県 》

第 16 回東海北陸小中学校音楽教育研究大会 愛知大会

研究主題 「音楽の力で 結び織りなす 生きる喜び」

～音楽のよさを感じ、かかわり合い、学びの意味や価値に気付く児童・生徒の育成～

1 はじめに

学習指導要領の改訂の柱の一つに「伝統や文化に関する教育の充実」が挙げられている。それを受け、本研究会では、我が国の音楽や郷土の伝統音楽に着目し、小中9年間の連続性を考えた研究を進めた。

2 主題設定の理由

音楽は、子供を取り巻く生活や社会において、音楽ならではの価値ある役割を果たしている。学校生活でも様々な行事において、他者と心を通わせ彩を与えるものとして、音楽は欠かせない存在となっている。だからこそ、子供たちには、音楽的な見方・考え方を自在に働かせながら、音楽によって生活を明るく豊かなものにしていく資質・能力を身に付けさせたい。それらの資質・能力は、学校教育の強みでもある仲間、教師、地域などの結びつきの中で養われる。結び織りなされる様々な関わりの中で音楽を学ぶことで、その意味や価値に気づき、生きる喜びを感じられる子供の育成を目指し、本大会の主題を設定した。

(1) 「音楽の力で」について

我が国の音楽や郷土の伝統芸能との出会いを通して、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成と、様々な国や地域の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるような国際社会に生きる資質を養いたいという願いを込めた。ますますグローバル化する社会の中で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実させることが必要である。このことは、自己及び日本人としてのアイデンティティーを確立することや、自分とは異なる文化的・歴史的背景をもつ音楽を大切に、多

様性を理解することにつながる。学校教育において取り上げなければ出会うことのない教材や経験することのない活動を子供に提供し、そのよさを味わわせることも学校教育の重要な役割の一つであると考えた。

同時に、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動を行うことで、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成していくことも大切であると考えた。

(2) 「結び」について

過去の自分の知識や経験と、現在の解決すべき課題を結び付け、見通しをもって主体的に学習に取り組む子供を育てたいという願いを込めた。そのためには、分野や領域、題材を超えた場面でも活用できる知識や技能を、思考力、判断力、表現力の育成と関連させて継続的に習得していくことが大切である。

「これを生かしていけば課題が解決できそうだ」という解決の見通しをもつことができるからである。こうした学びの見通しは、子供の主体的な学びに結びつき、新たな価値の創造につながっていくと考えた。

(3) 「織りなす」について

音楽との対話、自己との対話、仲間との対話、教師との対話など、様々な対話を通して学びを広げ深めたいという願いを込めた。うまく教えれば、深い理解を得るわけではない。子供は、自分の学習に積極的に参加することで初めて深く学ぶ。このことは、教師の指導技術だけでなく、子供の学習過程に焦点を当てて考えていくことが大事であることを示している。子供たちがすでに持っている、不完全で未整理な知識や技能を、子供たち自身の力で思考し、判断し、表現しながら再構築していけるように教師が支える必要がある。そ

の際、問いを焦点化し、知覚・感受したことを、言葉や体の動きなどで表したり、比較したり、関連付けたりなどしながら認識し、音楽との一体感を味わったり、音楽の要素の働きを理解したりして、他者と共有・共感する過程を重視することで、実感を伴った学びになるよう努めることが大切だと考えた。

(4) 「生きる喜び」について

もっと音楽とふれあいたい、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と結びついて生活を明るく豊かなものにしたいと思う子供を育成することへの願いを込めた。そのためには、授業を通じた自己の変容に気づき、学びの意味や価値を実感できるような手だての工夫が必要になる。仲間や教師からの助言や価値付けの言葉は、さらなる主体的な学びを促進するとともに自己肯定感の向上をも促す。自己の成長を明確にし、次の学習に向けてさらに問い続ける姿勢を継続して鍛える必要がある。

以上のような願いを込めて主題を設定するとともに、副主題を「音楽のよさを感じ、かわり合い、学びの意味や価値に気付く児童・生徒の育成」と定めた。

3 研究の内容

上記の主題を受け、研究の仮説を以下のように定め、3つの視点を設定した。

我が国の音楽や郷土の伝統芸能に出会い（音楽の力で）、知識や経験を基に、何に着眼し、どう学ぶかの見通しをもち（結び）、他者や社会と関わり、思考を整理し深化させる中でそれらの魅力に触れることができれば（織りなす）、我が国の音楽文化への親しみを抱く（生きる喜び）ことができるであろう。

【視点1】発達の段階を踏まえ、連続性・系統性を考えたカリキュラム

- ① 9年間の題材構造を意識した授業づくり
- ② 主体的な学びを支える知識及び技能を定着させる継続学習

子供が知識及び技能をどのように習得したり、学びの場でどう活用したりするのか。指

導過程を考える上で教師は、子供の発達の段階や実態を把握したり、今の学びがどの学びにつながり発展していくのかという義務教育9年間の学習のつながりを理解したりすることが必須となる。その把握や理解があつてこそ、目の前にいる子供たちにとって有効な手だてを講じることができると考えた。

そこで、義務教育9年間の指導カリキュラムを作成するとともに、領域ごとの系統表を作成し、小中合同の検討会を行うことで、連続性・系統性を意識した授業づくりを進めた。

【視点2】見通しをもって仲間とともに探究する授業の工夫

- ① 音楽を視覚化し、視点をもった対話場面の設定
- ② 知識、経験、課題、気づきをつなぐ教師の働きかけ

教師の指示を待っている限り、子供の思考は活性化しない。質の高い学びを生むためには、課題解決に向け、何に着眼し、どう考え学んでいけばよいのかという見通しを教師と子供が共有することが大切になる。音や音楽の世界を他者と伝え合い、共有するために、言葉や図、記号をはじめ、様々な形で音楽や思考を目に見えるようにすることで、対話を焦点化する。このときに思考の差異を相互に確認し、その根拠を詰めていくことで思考を整理し、学びを深めることができる。

また、「今日勉強する内容と自分にはこういう関係があるのだな」と思わせる取組や、教材に親しみを感じさせることも主体的な学びを促す上で大切になる。我が国の音楽や郷土の伝統芸能は、子供の生活の場でふれる機会は少なく、学習する意味も抱き難いであろう。子供の関心がある分野・得意な分野に結びつけたり、既習事項を想起させたり、子供たちが経験の中で学んでいることと結びつけていく教師の働きかけが必要となる。音楽のみを単体で扱うのではなく、音楽的な見方・考え方を働かせながら、文化や生活、風土な

どとの関わりの中で学習を展開することで、子供が、感性をより働かせて音楽にふれたり、より身近なものとして我が国の音楽や郷土の伝統芸能を捉えたりすることができるよう指導方法を工夫した。

【視点3】 学びの価値を実感して次の学びにつながる振り返り

- ①中間発表や意見交流など聴き合う場の設定
 - ②自己の変容に気付くような学びの価値づけ
- 学習を振り返ることによって、自分の学びの質と内容を自覚できるようになる。継続して振り返りを行うことにより、「学びに向かう力」を鍛えていきたいと考えた。中間発表や意見交流などで思いや意図を伝え合い聴き合うことで、思考を深めたり活性化させたりした。現段階の学びを全体で共有し、価値付け、次の学びにつなげる場面の設定は、子供の主体的な学びを促し、新たな価値を創造することに有効に働くと考えた。授業で学習したことが、これからの自分たちの生活の中で生きてくるといふ実感がもてるよう、振り返りの場を授業のどの場面でもどのように設定するのかを工夫し、指導の改善・充実を図った。

4 研究の成果

公開した2つの提案授業（2年生「おまつりの音楽をつくろう」〔音楽づくり〕及び6年生「日本の楽器の音色を味わって聴こう」〔鑑賞〕）の実践を通して述べる。

【視点1】

- 常時活動としてリズム模倣やリズム遊びの活動を継続的に行うことにより、強弱や速度など様々な要素と関連させながら音楽づくりに必要な技能の習得を図ることができた。〔音楽づくり〕
- 常時活動として行った、日本の伝統楽器の音色や旋律に焦点を当てたミニ鑑賞の成果として、同じ楽器でも違った趣の音色が出せることに気づき、旋律の表す情景や役割をより一層豊かに想像して聴けるようになった。〔鑑賞〕

【視点2】

- リズム譜やカードを使って音楽を視覚化し、視点をもって話し合わせることで、どの子にも見通しをもって主体的に音楽づくりに取り組ませることができた。〔音楽づくり〕
- 特徴的な旋律を図形で表し、時間軸図の上を示すことで共通認識がもて、グループでの話し合いが焦点化され深まった。〔鑑賞〕

【視点3】

- 中間発表で他グループの工夫を見つけさせ、それらを価値づけ、全体で共有することによって、表現の工夫への意欲や思いが深まった。〔音楽づくり〕
- 友だちと関わり合うことを通して新たに気付いたことを考えさせ、自己の変容に気付かせたことで、次への学びの意欲につなげることができた。〔鑑賞〕

5 今後の課題

- 数年来の取組で、子供たちはグループでの協働的な活動に意欲的に取り組めるようになったが、全体での意見交換でその学びを深めさせる問いかけができていない。
- 題材の中で身につけさせたい資質・能力は複数の領域が組み合わせられて養われる。1年を見通した計画を立てるとともに、不十分だった評価の研究を進める必要がある。本研究は、小中連携した我が国と郷土の伝統音楽に視点を当てた研究であった。9年間の系統表の作成により、学びの連続性が明確となった。また、今回は地域の保存会や演奏家と関わる機会が多かった。学校外の教育資源を活用することで、子供たちの表現や感じ方の幅が広がり、主体的に学びを深める姿に変容していった。「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」を育む音楽科の目標を達成するためには、社会に教育課程を開くことが欠かせない。今後も研究を進め、授業改善に取り組んでいきたい。